アッサムの一部茶園が消滅の危機に直面

強大なブラマプトラ河の絶え間ない浸食作用のために、アッサムの一部茶園が消滅の恐れに直面している。早急な処置を講じなければ、同地域の紅茶産業は、近い将来、歴史の一部になってしまう可能性がある。

場所はアッサム州 Tinsukia district（ティンスキア地区）。その近辺にある、Digulturrung、Baghjan、Rungagora、Nalini、Dinjan、Balijan、Thanai、Oakland、Greenwood、Maijan などの茶園の存亡が懸念されている。

一部の茶園では、既に、1992 年から 1999 年までの間に、浸食による被害が膨大なものになっており、茶園資産の損害は、およそ 53 億 7 千万ルピーに及ぶ。

浸食の問題は、1997 年以来激しさを増し、紅茶業界や Deputy Commissioner of Tinsukia district（ティンスキア地区副監督官？）は被害をたびたび明らかにしたにもかかわらず、政府や Flood Control Department（洪水管理局？）は、現在まで、何らの措置も講じていない。

複数の紅茶会社は、この問題の調査に、専門家を従事させることにしたが、紅茶業界だけでは解決不可能な大きさになっている。この問題が初めて注目された 1993 年当時、300～400 万ルピーで解決可能と見積もられていたが、現在では、30 億ルピー以上必要とされている。被害予想対象には、Dinjan 陸軍基地、Mohanbari 空港、Dibru-Saikhowa 国立公園なども含まれてしまった。

ロシアがスリランカと合弁事業を開始

ロシア政府は、国内にセイロン紅茶を供給するための合弁会社を設立するため、スリランカの Tea Smallholders Development Authority（小規模茶農家開発公社？）（以下、TSHDA）と契約を結んだ。

新会社は Rasslanka JV と呼ばれ、ロシア政府はその 51%の株式を保有する。TSHDA の開発と貿易を担当する Tea Shakthi が、残りの 49%の株式を引き受けた。同社は、ロシアにおける 5000 の販路を通じて、2000 万㌔を販売する潜在能力がある。

事業の開始は、来年１月になるだろう。

大手紅茶会社がカルテルを計画

インド系紅茶会社は、ここ数ヶ月の攻撃的な輸出努力にもかかわらず、価格低下に苦しんでいる。

Williamson Magor、Hindustan Lever、Tata Tea、Duncans、Dhunseri、Goodricke、Mcleod の各社は、非公開のミーティングを行ない、実行可能な戦略を決定した。

第１に、紅茶元詰めを兼ねる生産会社は、価格低下を抑え、パッケージ紅茶に対する需要を満たすため、カルテルを計画している（明らかな違法行為ではあるが）。

第２に、競合は、流通経費、販売費用、コミッションなどの様々な局面に関わる「委員会」を作ることを決定した。これは、紅茶生産のみを兼ねる小規模会社と、